

## ＜祈りのために＞

「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしてください。(途中省略、本文中で言及) 求める者には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。」

(ルカによる福音書6章27～30節)

この聖書の言葉は主イエスの山上の説教の一部です。35節からも「敵を愛しなさい」という言葉が再掲され、「そうすればいと高き方の子となる」と書かれています。マタイによる福音書においても同様の「敵を愛しなさい」という言葉がありますが、それに加えて「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」と書かれています。

主イエスの山上の説教は、通常なら不幸の典型と思われる三つの状態「貧しい」「飢えている」「泣いている」にある人々を「幸い」と告げることから始まります。それらの人々は間違いなく主なる神様の救いの対象であるからなのです。その後「富んでいる」「満腹している」「笑っている」人々は不幸だという言葉が続きます。今後逆の状態に陥るからです。しかし、主イエスはこのような「現状」の評価だけには留まらず、集まった人々に対して、より積極的なあり方について教えられます。それが「敵を愛し」なさい「平和を実現する人々は幸い」の御言葉です。

「平和を実現する人々」は、「平和を願う人々」や「平和のために祈る人々」ではありません。英語の聖書では以前は **Peacemaker** で、最近は **Those who work for peace** です。「労して平和を作り出す者」です。しかしこれは容易ではありません。そこで、最初に引用した箇所にもそのためになすべきことが書かれています。「敵を愛する」「憎む者に親切にする」「悪口を言う者に祝福を祈り」「侮辱する者のために祈り」「頬を打つ者には、他方の頬をも向け」「上着を奪い取る者には、下着をも与え」「求める者には、だれにでも与えよ」と。

このことは個人でも容易ではありませんが、共同体のことではほとんど困難というのが大方のご意見でしょう。友人との政治談議の際に「日本には平和外交がない。中国との関係改善のための外交交渉を魚釣島を与えるくらいの覚悟と知恵を持って行わなければ」と発言したところ、その友人はキョトンとした顔をし、「ありえない!」とつぶやきました。大方の日本人にとってそのようなことは考えてみたこともないし、考えようもしないのでしょうか。政治家も全く同様です。安倍首相も機会あるごとに「国益は何一つ譲りません。」と発言しています。しかし、譲ること、例えば共同使用でも良いですが、によって相手国と平和、友好、不可侵などの条約ができれば、それは大きな「国益」ではないですか。

聖書は「敵を愛」し「求めるものに与え」ることによって「たくさんの報い」と「いと高き方の子となる」と告げ、また「平和を実現する」ことによって「神の子と呼ばれる」と告げます。真に敵を愛することはさほどに困難なことです。死を賭して人間の罪を贖い神との和解を成し遂げられた主イエスが、私たちに「敵を愛」し「平和を実現」せよと言われていることを、私たちも感謝と覚悟を持って受け止めたいと思います。

澤田 磐雄 (西宮中央教会長老)

## ヤスクニ問題とわたし

住谷 眞 (小平教会牧師)

昨今の情勢は多くの人が話題にしている。わたしは伝道者として、国々や人々が互いに相手をこころからリスペクトすることが大切であり、そのためになによりも和解の福音をのべ伝えること、伝道が大事だと思っている。教会が政府の監視下にある中国もいまや9000万人以上の人々がクリスチャンと聞く。やがて中国も変わるであろう。

徳島教会時代、中国の内モンゴル出身で日本に来たS君に洗礼を授けた。内モンゴルには牧師はひとりもないが地下教会があり、洗礼は受けられないが、家族はみなクリスチャンである。洗礼を受けたいということだった。今東京で貿易会社の社長をしている。先日、母と夫人とふたりの娘とともに小平の礼拝に見えた。礼儀正しい青年である。

話は変わるが、叔父はかつて那覇空港で航空管制官をしていた。叔父が言うには、米軍機が民間機に優先で進入し着陸して来るということだった。叔父は亡くなるまで飛行機には乗らなかった。空港への進入高度は米軍機が一番入りやすくなっていると聞く。

沖縄には二度旅したが、初めに行ったのは、2003年の46歳の時で東京に来てからである。それまで行かなかったのは、自分なりに思うところがあったからである。

その年の夏、娘と行った。観光というより個人のスタディと鎮魂のためである。沖縄のとくに南部の戦跡を観光バスで回った。バスのガイドは宜野湾の若い女性だった。

米軍基地、司令部の地下壕などをめぐった。ひめゆりの塔のそばには多くの土産物店があり、観光客であふれていた。塔は思ったより小さかった。フェンス向こうの基地の奥にF15も見た。米軍住宅はひっそりとしていた。アメリカ人のこどもがひとり自転車で遊んでいる。米軍の上陸地点は静かなどこまでも青い海だったが、上陸時には米軍の艦船で水平線が見えないほどだったと聞いた。摩文仁の丘の祈念館では記帳もした。風がうなり、雨あしが強かった。琉球村だったか、平和な植物園の真上の空をととても低く米軍の戦闘機がつぎつぎと直線をなして飛んでいく。ものすごい音だった。

それを見て幼年時の記憶がよみがえった。わたしは新居浜で幼稚園時代を過ごした。ある日、すぐ真上を三角翼の大きな戦闘機が音を立てて飛ぶのを見た。大人になって四国では岩国基地からの戦闘機が超低空飛行訓練をしており、そこがルートだと知った。

基地のことを熱く語りて涙ぐむバスのガイドは宜野湾のひと  
戦ひに敗れし太田中將は民ねぎらひて遺志をとどめり  
絶え間なくスクランブルの轟音にブーゲンビレアは紅を震はせ  
人垣を分けて額突くひめゆりの塔は小さくも悲しみ伝ふ  
戦ひに散りし者らの慟哭か摩文仁の丘に風うなり過ぐ

## 日本キリスト教会とヤスクニ問題

井上 一雄（名東教会牧師）

最近、ある教団では、政治や社会の問題への取り組みにおいて、内部に乖離や二極化が増しているという。「多様さ」は、この場合、「豊かさ」に置き換えることはできない。事このことに関しては、互いに言葉が通じないこともあると聞く。不幸なことだ。だが、今に始まったことではない。教団の創立にも関る問題も背景にあるだけに、単純に論ずることはできない。しかし、そこには「神学の問題」があることは確かである。

別の教派の指導者から、「日本キリスト教会は、一枚岩だから安心して付き合える」と何度か言われた。しかしあえて言葉は返さない。素直に頷けないものが、こちら側にあるからだ。

政治や社会の問題の関わりにおいて、教会に今、問われているのは、「どう取り組むか」という運動論とともに、あるいはそれ以上に「どう考えるか」という神学の営みではないか。立ち止まって、この課題に真摯にそして地道に取り組まない限り、先の教団のような「不幸」が待っている。いや、それは既に始まっているのではないか。政治や社会の悩ましい課題に、一方が熱心に取り組めば取り組むほど、裂け目は増す。

主イエス・キリストは言われる。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」（マタイ 22 章 21 節）と。教会は、国家や社会との関りにおいてこの御言葉の前に常に立たされている。宗教を政治運動として直接展開しようとする熱狂主義、政治が宗教を支配しようとするファシズム。両者はこの御言葉によって斥けられる。

主は、「もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない」（ヨハネ 18 章 36 節）とも言われる。教会の戦いは、血肉を相手にするものではないのだ（エフェソ 6 章 12 節）。

しかしまた、観念の世界における戦いでもない。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」は、皇帝に対する単なる忠誠のすすめではないばかりか、教会に政治への関りを禁ずる命令でもない。また、政教分離の原則の正当性を単に裏付けるだけのものでもない。主イエス・キリストの権威は、この世の全ての権威の上にあるのだ（エフェソ 1 章 20～23 節）。ゆえに、政教分離原則を教会に押し付けてはならない。二元論になってしまう。

それは、悪魔化するこの世の権力（ヨハネ黙示録）を縛るためにある。民主主義国家における「皇帝」とは、誰か。国民ではないか。「皇帝のものは皇帝に」返さなくてはならない。しかし、そのために権力者を縛るはずの憲法を、勝手な解釈によって歪めようとする権力者がいる。しかも、国民が投票行為による権利を行使できない状況を作った上で、それを行おうとしている。これを「悪魔化」と言わないで、何と云うか。

## <ヤスクニ・ニュース>

### 陸上自衛隊の北部方面隊（北海道）隊員たちに「遺書」

陸上自衛隊の北部方面隊で、2010～12年、隊員たちが「遺書」とも受け取れる「家族への手紙」を書くよう指示されていたと、元隊員は語った。彼が北部方面隊鹿追駐屯地（北海道鹿追町）に所属していた2010年12月、上官から突然、「休暇前に『家族への手紙』を書くように」と、A4判の白紙1枚と茶封筒を渡されたという。目的を問うと「万が一何かあった場合の家族に残す言葉」と言われた。北部方面総監は「事に臨んでは危険を顧みず、身をもって責務の完遂に努める」という自衛隊法の規定を実践するのが目的で、「任意で命令ではない。遺書という認識はなく家族への手紙」と説明した。

しかし、元隊員は「手紙は遺書と受け止めた。同僚たちもみな『あれは遺書だった』と言っていた」と振り返る。「自分は国を守る忠誠心がある。しかし、今の時代、どんな大義があっても命をかけると言うのか。自分が入隊の宣誓をした時は、よその国の戦争に加勢することは想定していなかった。加勢で海外へ派遣される仲間は死んでも死にきれないだろう。後輩らは今も手紙をロッカーに保管しているかもしれない。死を美化するために使われかねない。勇気を持って疑問の声を上げてほしい」と語る。彼は7月11日、北海道弁護士会連合会の集会で手紙の問題を訴えた。安全保障関連法案が成立すれば、陸上自衛隊もこれまでの人道支援から、戦闘部隊とより一体化した後方支援などを担う可能性が高まる。その時には単なる精神教育ではなく、実際に遺書を書かせることが現実化するかもしれない。（毎日新聞 7月11日）

### 特定秘密保護法に反対する牧師の会

5月14日、安倍政権は「平和安全法制整備法」案、「国際平和支援法」案を閣議決定した。その日、「特定秘密保護法に反対する牧師の会」（共同代表：朝岡勝、安海和宣）の牧師ら有志7人は、自民党・公明党の政務三役クラスの議員を中心に国会議員会館の控室を直接訪れ、要請行動を行った。要請項目は、①『秘密保護法』撤廃、②「平和安全法制整備法」「国際平和支援法」の法整備を行わないでほしい、③憲法9条を守り生かしてほしい、の3項目。合わせて「国会で十分な審議を」と訴えた。

19人の議員を訪問。安倍晋三首相、石破茂国務大臣、谷垣禎一幹事長、山口那津男公明党代表などの部屋では秘書が応対し、要請文と賛同者の声をまとめた資料と聖書などを受け取り、「要請趣旨は議員にしっかり伝える」と約束した。閣議決定当日の与党議員への要請で門前払いを覚悟していたが予想に反して長時間参加者の訴えに耳を傾けてくれた。法案提出が国民の理解を得ていないことは議員も感じている様子だった。自民党内でも様々な意見があり、全員がもろ手を挙げて集団的自衛権行使に賛成ではないことも感じられた。

「法案提出より前に、首相がアメリカで勝手に成立を約束してきた。国民はもちろん国会さえもがないがしろにされている憂慮を伝えることができた」、「違う意見の相手も、粘り強く働きかけていくことで心を動かしたい。手応えを感じた」と感想を話した。

参加者らは要請行動の前に、国会議事堂が見渡せるロビーで為政者たちに祈りをささげた。衆議院本会議の傍聴に入った議場でも祈り、閣議決定の行われている時刻に首相官邸の傍らでも祈りのときを持った。

「特定秘密保護法に反対する牧師の会」

727号ヤスクニ通信 2015年8月9日  
発行 日本キリスト教会  
靖国神社問題特別委員会  
発行人 栗田英昭 編集 川越弘  
印刷発行 篠塚予奈（東京告白教会）  
〒157-0061東京都世田谷区北鳥山  
1-51-12 TEL&FAX03-3300-6529